

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3390101677		
法人名	医療法人よつば会		
事業所名	グループホームメディフル藤田 【花ユニット】		
所在地	岡山県岡山市南区藤田1134番地2		
自己評価作成日	令和2年10月12日	評価結果市町村受理日	

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

認知症の進行や身体機能低下もあり、一人ひとりのできる力はさまざまですが「できる力」を大切に維持できるように支援しています。現在は男性が多く、力仕事や畑・草取り等を、女性は家事全般を職員と共に役割分担もできていてお互いに助け合いながら生活を送っています。ホールは広い空間ですが、少人数ごとに座れるようにスペースを設け、気の合う者同士が思い思いにゆったりと過ごしています。隣の空ユニットや別棟東館の方との交流もあり顔馴染みの関係が出来ている方もおられます。今年度半年にわたり法人内で「接遇研修」があり、チームでその重要性を再認識しながら目標を立て取り組んでいます。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ライフサポート		
所在地	岡山市北区南方2丁目13-1 県総合福祉・ボランティア・NPO会館		
訪問調査日	令和2年10月30日		

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

日本国中で見ても「由緒ある干拓地」と言われるこの地「藤田」に、「GH・メディフル藤田」が定着して地域に馴染んできた。このホームから自宅が見えるような近所さんが入居したり、この地域の方々が多くなってきている等、地域密着型の施設としては理想的な状況と思われる。この記録の中からも地域とのつながりの広さと深さが見受けられる。このホームの優れている点は地域とのつながりだけではない。利用者本人はもちろん、家族の思いや意見に色々なチャンスを捉えて耳を傾けようと努力している事と思う。グループホームの本来の有り方を守り続けようと努力しているホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	ケア理念は掲示しており、申し送りやミーティング等で常に意識づけを行い、日々のケアに結び付けていて全体的に共有が図れている。	利用者一人ひとりの思いや「出来る事・出来ない事」を職員がしっかり理解・把握して、その人らしい日常を何より大切にしているからだろう。人懐っこそうな皆さんは、それぞれ好きな事をしたり、気軽に初対面の私達に多くの方が話しかけてくれた。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	町内の行事(祭り、サロン、交流会)への参加、保育園との交流は続けていたが、コロナ禍で中止となり出来ていない。地域のクリーン作戦は職員が参加できた。	現在はコロナの関係で思い通りの交流は出来ないが、地域とのつながりは多く、連合町内会にも加入し、数多くのイベントや慰問としての交流等に参加している。地元の方々のホームに対する近親感が記録から伝わってくる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議の場を通して、認知症や防災対策など地域でも関心の深いテーマを取り入れて共に考えたり学び機会を提供している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	昨年度末より会議は書面開催であるが、意見や要望をいただき、内部に反映できるよう検討するとともに、議事録の回覧にて内容は職員に周知も出来ている。	日頃からこの会議で参加者から良い意見をいただき改善している。顔を合わせた会議はもちろん良い取り組みにつながっているが、コロナ期の方法でも、それなりに各々の意見が届き有効な会議になっている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市担当者とは管理者がこまめに連絡を取り、運営の確認をしている。運営推進会議は書面であるが情報交換等行っている。	通常なら定期的実施している運営推進会議で連携を取る事が出来るが、コロナ禍の現在は直接話し合える電話を通して連携を取るようになっている。市の担当者からも、その都度指導や情報提供をしてもらっている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	年4回の検討会だけでなく、日頃から考えながらケアの実践につなげている。施錠はしていないが、自由を奪わないように言葉の制止も行わないように努めている。	日々の生活の中だけでなく、定期的に内部研修をしている。ある場面を設定して話し合ったり、スピーチロックについて考えてみる等、「拘束をしない」事を目標にするのではなく、利用者の尊厳や生活の質の向上を目指す事につないでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	身体拘束と合わせて定期的に研修を行い、自らのケアを振り返っている。不適切なケアについてはお互いに意識しながら声を掛け合うようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	尊厳の保持＝その人の権利を護ることであることを研修等で理解はできているが、制度を活用している利用者がいないため全体的に不十分さはある。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約開始時はもちろん、入居途中に制度改正や利用料金変更、人員体制変更など契約内容に変更があった場合は、必ず書面によって説明と同意ができています。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者には日頃の会話などから聞くようにし、家族は面会や電話等で意見や要望を聞くようにして記録に残し、反映できるようにしている。全ての家族から聞きとれているかは不十分などところもある。	日頃の利用者・家族との遣り取りの中で思いや要望を聞き取るよう努力している。また、運営推進会議のアンケート等でも家族からの意見が見られたり、「苦情報告書」からも家族からの率直な訴えが記録されている。この様なホームにはあまり出合った事がない。	ホーム全体がゆったり広く、菜園もあり、農作業を続けているのはAさんの家族とか。家族のホームへの思いが伝わってくる。この様な絆の深さは何にも代えがたい。この空気を大切に継続して下さい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	定期的な面談やミーティング等職員の意見が言える場はあり、意見や提案を反映してくれている。	日々の生活の中で、ミーティングの中で、また丁寧な記録や綿密な申し送り等によって情報の共有が確実に出来、日々のケアにつないでいる。と同時に意見や提案を大切にする場面も持ち、管理者が定期的に個々の職員と面談をしている。	外部評価を受ける前に各ユニットでそれぞれ自己評価をしているので、このチャンスを活用して各ユニット毎に状況や評価をそれぞれし合い、書面にしてみるのも有効ではないか。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	個々の事情を聴きながら勤務時間等を調整している。人員不足で、残業が常態化していたり、休憩時間が曖昧になっている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	年間計画により研修を取り入れて学びの機会は提供できている。個々の目標設定を行い定期的に振り返りも行っている。外部研修は参加できていないのが現状である。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	外部研修参加時は同業者と交流の機会があるが今年は参加出来ていない。内部の交流も今年は自粛しており、交流の場が設けられていない。管理者の活動を聴く機会はある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前の面談には、自宅やデイサービス等の生活の場へ伺い、本人と直接話ができるようにしている。入居への理解のできる方は少なく、混乱や不安を受け止めるよう職員は情報共有し信頼関係の構築に努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居検討(見学)から決定までの不安な気持ちや経緯などを丁寧に伺いながらサポートするように努めている。入居直後は特にこまめに連絡して安心して頂けるようにし信頼関係を築いていくようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居決定は、本人家族の状況から緊急性を重視している。またできるだけ地域の方々を優先している。本人や家族だけではなく、これまで支援に関わっている事業所からも情報を得ながら、他のサービスが適切であると思われる場合はその説明や対応も行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人がどうしたいか、何がしたいかに耳を傾けながら支援している。利用者から教わることも多く、一方的なケアにならないように「共に過ごすことの大切さを共有している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	入居によって家族との関係性が途切れないよう面会だけでなく手紙や電話も活用し、様子を伝えたり、今までの暮らしを聞いたりしている。今は、面会が制限されゆっくり会うことが出来ていないため、よりこちからの報告が大切と感じている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人の記憶が薄れていく中で、必要性は共有できているが、実践が単発的で継続できていない。限られた人になるが、本人の住んでいた家の近所、昔よく行っていた地域へのドライブへ行くことはできた。	以前はよく家族と外出・外泊をしていた人も重症化やコロナ禍の中で今は出来ない状況にあるが、安全対策を十分に取りながら家族との絆が途切れない様に様々な工夫をしている。入所者同士も馴染みの関係となり、本館、東館の間で趣味を通じた交流もあると聞いた。それぞれの馴染みの関係を大切に支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の関係性を見極めながら、交流が図れる場面や環境づくりに配慮している。誕生日等のお祝いにはお互いにお祝いの言葉を伝える姿もある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居時は、アルバム作成してお渡ししている。退居後も継続的に畑の手入れをして下さるご家族もいる。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日頃の関りの中で、希望や困りごとなどを聞き取り知ろうとする姿勢は継続できている。言葉にできない方、内に秘める方などは家族に尋ねたり表情や行動からくみ取るようにして、カンファレンスで話し合うようにしている。	生活歴や介護記録、利用者と職員との会話からも、「一人ひとりの思いや意向」「出来る事・出来ない事」等を職員がしっかり把握して、家族にも確認しながら、その人らしく、本人本位を大事にしながら支援している事が確認出来た。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人、家族だけでなく利用していた関係機関から生活の様子を聞いている。入居後もケアに困難が生じたときは改めて確認しながら、これまでの暮らし等の把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人ひとりの生活リズムは把握できている。本人の力を大切に、日頃の様子を観察し記録し、申し送りやカンファレンス等で確認して共有している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人の希望は日頃の会話から、家族へはカンファレンス前には意向を改めて確認している。現状に必要な支援を職員全員で振り返りシートを活用して意見を出し合い、カンファレンスで話し合いをしている。	本人・家族の意向を基に職員間で話し合っケアプランを作成しているが、アセスメントやプラン実施状況確認カンファレンス(プラン実施の振り返り)を通してその時々本人の意向も再確認しながら、ニーズを掘り起こし、その人らしく暮らせるプラン作りに努めている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	本人の様子や言ったこと、いつもと違うことなどを日々の記録に残すようにしている。その都度記入するようにしているが後回しになることもある。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	その時に必要な支援を可能な限り行っていきたいが、ホーム内で止まっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	訪問理美容、花屋等は継続していて、避難訓練では消防署の協力もあった。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人、家族の希望のかかりつけ医や歯科、眼科や専門医等の支援を行い、適切な医療が受けられるようにしている。協力医療機関とは、密な連携がとれていて24時間の対応が可能である。	定期的に協力医療機関や連携看護師が訪問しており、本日も往診の場面に会った。歯科衛生士との連携や訪問歯科もある。他科受診は原則家族が付き添うが、利用者の状況をよく把握している職員が同行しており、医療と介護の連携もよく出来ていて安心である。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	連携看護師の定期的な訪問により、健康管理を行っている。体調の変化時は相談や助言などスムーズに連携が図れている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時の情報提供や入院中は面会や様子の確認、退院前には訪問し情報の共有を行いながら退院後の受け入れ体制を整えている。家族との連絡も密に行いながら不安に対応している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時だけでなく、入居後も定期的に意向の確認を行っている。終末期に近づいた時には医師、家族、GHでできること、出来ないことなど丁寧に説明しできるだけ意向に沿った対応をチームで支援している。揺れ動く家族の気持ちに配慮している。	開所以来、十数名の看取りを経験してきた。記録を見ても、それぞれの人の最期の時を温かい眼差しでしっかりと向き合っている様子がよく分かる。「ここで最期を」との本人・家族の強い希望も多く、職員は数々の人生の終焉に立ち会ってきた。現在もターミナルの人がいるが、出来る限りの支援を心を込めてしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時のマニュアルはあり、確認はしているが実際対応できるか不安な職員が多いため、研修等で訓練はしていかなければいけない。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	地域性から必要な災害に対する研修や訓練により意識づけを行っているが今年あまりできていない。災害伝言ダイヤルの操作訓練を定期的実施。火災避難訓練は昨年度の外部評価助言を受けて消防署の立ち合いのもとで実施した。	年2回昼・夜間想定火災・避難訓練を実施。災害対策について目標達成計画にも挙げ、運営推進会議でもよく話し合っている。また、避難準備情報が発令された時点から避難体制を整えるまでのシミュレーション訓練を実施し、日頃から職員間の意識付けをしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	人生の先輩として尊厳を大切にすることを常に心掛けているが言葉づかいや対応が慣れ合いとなっている場面もある。プライバシーへの配慮に欠けた言葉使いや大きな声になっていることが多い。	一人の大人として尊重する事はもちろんの事、本人の持っている力を見極め、出来る事を大切に支援する事を常に心がけている。また、プライドや羞恥心には特に配慮し、トイレのノック、入浴時の同性介助、言葉遣い等に気をつけている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常的に選択肢を設けながら自己決定のできる対応に努めているが、職員が待つことができずに決めている場面も多くある。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりのペースや過ごし方は様々であるが時間を決めずに希望に沿ったケアに努めている。やむを得ず職員の都合になる場面もある。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	毎朝服を選んだり、お化粧をしたり、髪を染める等身だしなみを整えて一日を気持ちよく迎えられるように支援はできているが、髭剃りや爪切りケアに不足を感じる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	調理や盛り付け、片付けまでを一緒に行い、食への関心や楽しみに繋げていけるよう努めている。献立をもとに畑で収穫した野菜を使用し、個々の好みや食事形態にも配慮している。	リビングに入ると、エプロン姿のBさんが職員かと見間違える程、生き生きとした表情で調理中。隣にいる職員さんとの息もピッタリで会話も楽しそう。ここでは毎日繰り広げられる食事前の光景のようだ。食べる事の楽しみに加え、それぞれに自分の出来る役割があり、手作り料理を皆で美味しく頂いた。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人ひとりの一日の摂取量を把握しながら、食べやすさ、飲みやすさ等の形態を見直し、栄養の確保(代替え・高カロリー食品)にも柔軟に対応している。水分量は少ない方には、好みの物や夜間にも提供して工夫している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔ケアの大切さは理解しているが、毎食後までには至っていなかったり、自立の方には不足しているが、寝る前は必ず行うようにしている。歯科衛生士に助言を受けながら個々に応じた歯ブラシ・歯間やケアの仕方と学び実践していくようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々の排泄パターンを把握し、タイミングを考えながら誘導し、失敗や不快が長く続かないようにしている。オムツ類も個々に合った物を随時検討しているが使用する枚数が減っていないのが課題でもある。	排泄が自立で日中は布パンツで過ごす人も数人いて、基本はトイレ座位での排泄だが、男性利用者の中にはその人の意志を尊重し立位での排泄も支援している。その人に合わせた適切な声掛け・誘導等により紙パンツから布パンツに変更した人もいと聞いた。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	乳製品や寒天ゼリー等を勧めたり、運動や同じ時間にトイレに座ることをしてはいるが、内服薬に頼ることが多い。便秘から体調や精神的にイライラに繋がりがやすいので注意している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴する日や時間は決めず、なるべく本人の希望による入浴ができるようにしている。寝る前に入ることで安眠に繋がる方もいるため、夜間入浴も毎日行っている。体調不良時は足浴や清拭を行い清潔を保てるようにしている。	入浴は利用者と職員とのコミュニケーションを図る大事な時間・場所であり、その人のこれまでの生活習慣も大切にしながら、一人ひとりに合わせた入浴支援を行っている。毎回一人づつ湯を入れ替えたり、好みの湯の温度に調節する他、ゆず湯等で季節感も楽しんでもらっている。	ライフサポートでは「10分間ケア」を推奨しており、業務で忙しい中でも一日10分間でもその人と一対一でじっくり向き合い会話をすることで、満足感を持って頂けると思っているが、このホームでは日々それが当たり前のよう実践出来ている。これからも継続して下さい。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中の活動にも目を向け、その日の体調や疲労に応じて休息をしている。毎日同じ時間に休む、眠たくなるまで起きている等本人のペースに合わせている。寝具や照明、室温などにも配慮している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	今年度より薬は薬剤師が管理しているが、直接的な内服支援は職員が行っている。飲み忘れが続いたため職員の意識を高める必要がある。薬変更時は特に様態の変化に注意している。一人ひとりの薬の用法等の理解は不足していると思われる。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりの出来ることや得意なことは職員間で共有できていて役割として行えている。趣味や嗜好品、楽しみごとの把握は出来ていない方もいて意欲を引き出したり活かせるようにしていきたい。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	感染症対策により外出は控えているため、ドライブ程度である。行きたいところを尋ねて外出を楽しみに待つことにも目を向けていく必要はある。日常的に中庭や隣の東館、ホーム周囲を散歩することは続けている。	今年はコロナ禍にあって社会全体で外出の自粛が続く中、イベントや行事も中止や縮小を余儀なくされているが、ホーム周辺は自然が豊かで交通量もそう多くないので、天気の良い日は日光浴・外気浴を兼ねて散歩やベランダでの喫茶等で気分転換を図っている。	両館の男性利用者ばかり集い外でBQ。ホーム内でお菓子の売店を数回開く等、例え外出が難しくてもいろいろな楽しみを企画し、職員間で話し合い工夫を重ねている。とても良い取り組みだと思う。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を持つことで安心できる方は管理しているが、買物等の機会がなく、ホームで売店をした際には欲しいものを買うことができ喜ばれていた。お金を使う機会として単発にならず継続することが必要。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	面会自粛の時期は、手紙や電話、ビデオ通話で家族とやり取りができるように支援はしていたが、面会ができるようになり減っている。これも継続することが課題である。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	広いホール内を、利用者の動線や心地よさを考えてテーブルやソファで区切っている。手の届くところに新聞や雑誌、レク用品を置き、目に見えやすい場に花を飾っている。季節感の工夫をもう少ししたい。	両ユニットのリビングは共に広くゆったりとしているが、調度品を含めそれぞれに趣が異なり、利用者さん達も自分の好きな居場所で寛いでいる姿が印象的であった。また、外のベランダからもユニット間を行き来出来、庭には菜園、その向こうは田園風景が広がり自然や季節感も満喫出来る素晴らしい環境である。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	少人数で座れるようなスペースを作っている。個々に応じて定位置が決まりつつあり、お互いの関係性に配慮は必要である。玄関やテラスのベンチを活用もしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	馴染みの家具や日用品、写真やアルバム、本人の趣味、嗜好品等に囲まれて過ごしている。使いやすさ等配置などの見直しも行っている。単に置いているだけではなく活用に繋げていきたい。	本人の趣味の作品や思い出の写真を飾ったり、家族の写真、使い慣れた調度品等、家庭での生活の延長線のような居室が多い。各居室に掃除道具が置いてあり、動線やリスク回避・安全対策等も考えながら居室環境や快適に過ごせる空間作りに取り組んでいる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	バリアフリー、手すりは整っているが、利用者の使い勝手やトイレの表示を大きく工夫する等その時の利用者に適すようにしている。スロープもあるがあえて階段を使うこともしている。		